日本在来ブルーベリー「ブンブクチャガマ」を用いた商品開発

事業代表者：農学部教授　守山　拓弥

（１）　事業の目的・意義

「ブンブクチャガマ（以下、本種という）」はブルーベリーと近いツツジ科スノキ属の在来種であり標準和名はナツハゼという。実は小ぶりのブルーベリーのようで、食味も良く、野性味のあるブルーベリーのようである。本事業は、宇都宮市宮山田地区の地域振興を目指し、地域の里山に自生する本種の栽培化と商品化を検討することを目的とする。予算を必要とする理由は、本種の栽培化に農業資材費を要すること、商品化に農業資材費（挿し木苗作成費）と食料品等費用（飲用酢および容器等）を要することによる。継続する理由は、H28 年事業の助成をうけ実施した当研究室の研究（吉田ら 2017）により過去（昭和 30 年代）に同地区で自家消費的に本種が食べられていたことが明らかになったこと、本種を商品化する取り組みが H29 年度中に地域内のコンセンサスを得たこと、地区内の里山で大規模な自生地が発見されたこと、等により商品化の可能性が高まったことによる。

（２）　研究方法（又は事業内容）

H28 年度（始期）に地域住民を対象とし聞き取り調査を実施し地域資源の把握と商品可能性のある種としてブンブクチャガマを選定した。H29 年度に地域内コンセンサスの形成および自生地の調査、移植技術の検討（文献調査および挿し木苗作出試験）を実施した（H29 年度は自主事業として実施）。H30 年度以降の事業では、本種の栽培化と商品化を目指す。栽培は山捕り苗の畑地への植栽と挿し木苗の作出である。畑地に植えた本種からは次年度以降に果実の収穫と果実の商品化（飲料を想定）、挿し木苗はそれ自体を商品とすることを検討している。本種の活着状況により事業計画の年限は変化することが予想されるが、おおむね H30 年度に植栽（同地区内畑地を選定中）および挿し木苗の作出、H31 年度に植栽木の果実の試験的収穫と調理方法の検討および挿し木苗の増産、H32 年度（終期）に果実および挿し木苗の販売開始というスケジュールを想定している。なお、販売は同地区が自主運営している直売所での実施を想定している。

（３）　事業の進展状況

H30 年度に実施した内容は、山捕り苗の畑地への植栽と挿し木苗の作出である。

①　山捕り苗の畑地への植栽

山捕り苗を畑へ移植した。その後、畑地管理は地域住民が主体となり実施。同研究室でも複数回同地区を複数回訪れ、順調に活着している様子を確認した。

なお、若干の開花および結果は見られたが、植栽年であることから商品化の試行に用いることができる量の収穫はなかった。

山捕り苗採取状況

植栽状況

② 挿し木苗の作出

6 月 12 日

・手塚小一郎さんの山にて枝を採取

・大学内で水に浸し保存

6 月 14 日

・オキシベロン液剤（インドール酪酸）に 24 時間浸す。

6 月 15 日

・鹿沼土及びピートモスを１：１で混合した土をポットにつめ挿し木

・1 週間ほど写真のような状態で管理

・その後場所を移し栽培（写真無し）

・遮光性の被覆資材の内側に不織布シートを被せた状態で管理。

水やり

・午前 9 時～11 時に 1 日 1 回

・雨天時はしない

7 月中旬頃までは数本枯れていたが、その他は葉を確認できていた。しかし、7 月の猛暑および 8 月～9 月の台風後に全て枯れてしまい失敗。

失敗の要因考察

・園芸用の簡易的な被覆資材でしか準備ができていなかったため

・気候条件が良くなかった、7 月の猛暑やゲリラ的な豪雨

（４） 事業成果

山捕り苗の畑地への植栽が成功した。一方、挿し木苗の作出には失敗した。

（５） 今後の展望

① 山捕り苗の畑地への植栽

山捕り苗からの果実の収穫と果実の商品化（飲料を想定）、挿し木苗はそれ自体を商品と

することを検討している。
　また、商品化するための保健所への申請等も予定している。

②　挿し木苗の作出

　一方、失敗した挿し木苗について、半屋外で水管理を徹底することにより再度挑戦する予定である。
　水管理には、自動散水機を用い、一日に複数回の散水を行う。さらに、屋根のある半屋外で実施することで、降雨、暴風、および直射日光による影響の緩和を想定している。